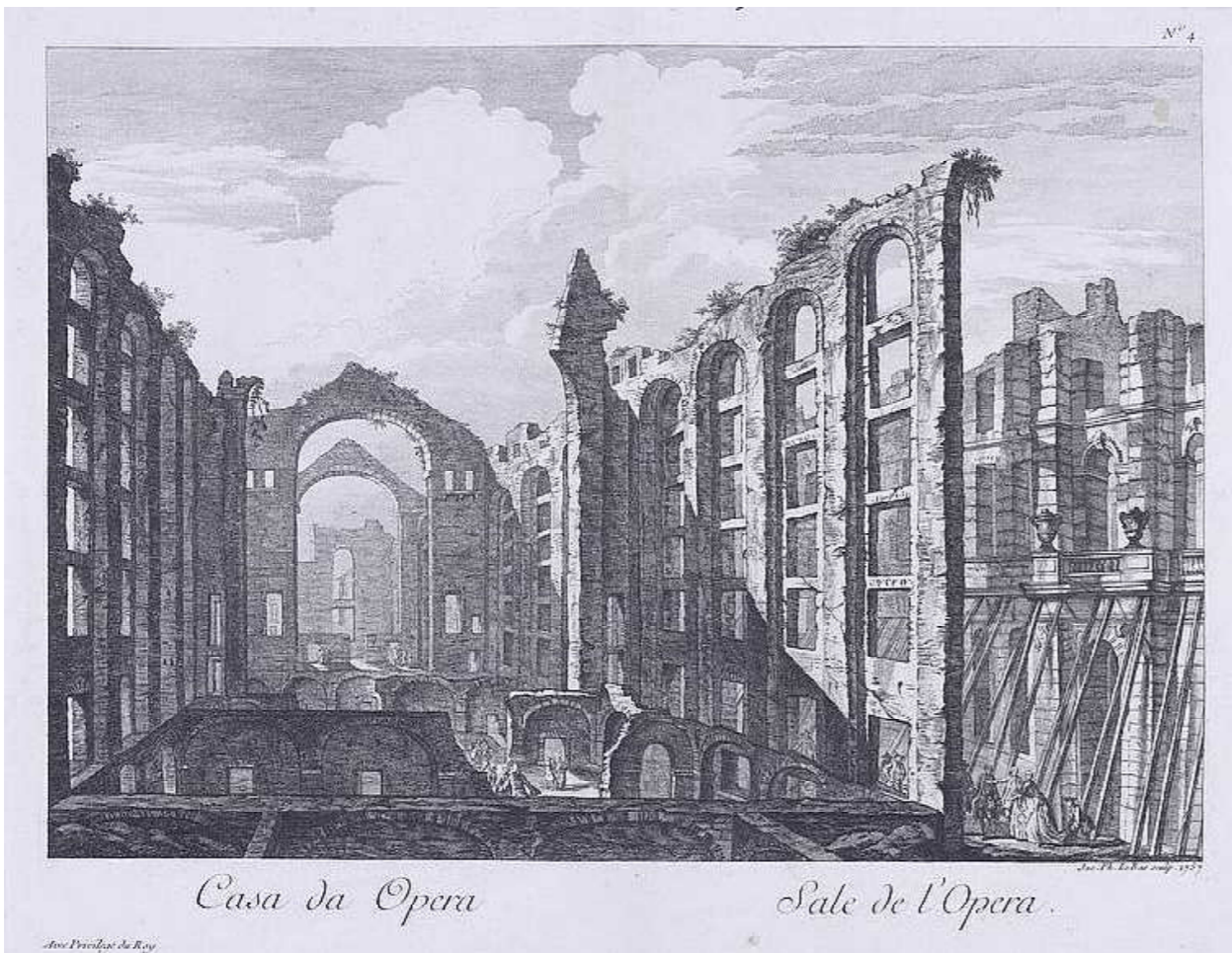


# 論文二ノ一

## ポルトガル宮廷の栄華とテージョ王立新歌劇場の全壊

「この歌劇場がきわめて広壮であつて、軍人は騎馬で乗り入れた。遠近法を駆使して歌劇に相応しい特色ある背景が舞台に組まれる。ここに招かれた多数のイタリア人音楽家は、ヨーロッパにおいてみな最良の部類に属した。〔中略〕ヨーロッパにおいてとくに著名な歌劇場、経費数百万クルザードと言われる歌劇場が、儂くも一気に壊滅した。まさしく火焰によつてすべてが燃え尽き、灰塵に帰したのである。」

(マヌエル・ポルタル『リスボン壊滅史話』)



**ALESSANDRO**  
NELL' INDIE,  
DRAMMA PER MUSICA  
DA RAPPRESENTARSI NEL GRAN TEATRO  
NUOVAMENTE ERETTO ALLA REAL CORTE  
DI LISBONA,  
*Nella Primavera dell' anno MDCCCLV.*  
PER FESTEGGIARE  
IL FELICISSIMO GIORNO NATALIZIO  
DI SUA MAESTÀ FEDELISSIMA  
**D. MARIA ANNA**  
**VITTORIA**  
Regina di Portogallo, Algarve, &c. &c. &c.  
PER COMANDO  
DELLA SACRA REAL MAESTÀ  
**DEL RE FEDELISSIMO**  
NOSTRO SIGNORE.  

---

LA POESIA DEL DRAMMA  
E' del Celebre Sig.<sup>o</sup> Ab.<sup>o</sup> Pietro Metafasio, Romano,  
Poeta Cesareo, &c.  

---

LA LICENZA  
E' del Sig.<sup>o</sup> Giuseppe Bonechy, Fiorentino,  
Poeta di Sua Maestà Fedelissima, et in actual Servizio delle Corti  
di Vienna, e di Pietroburgo.  

---

LA MUSICA  
E' del Sig.<sup>o</sup> David Perez, Napolitano,  
Mastro di S. A. R. la Signora Principessa del Brasile, e delle Signore  
Infante di Portogallo.  

---

**LISBONA,**  
Nella Regia Stamperia SYLVIANA, e dell'Accademia Reale.  
25 DCG LV.

〔右図〕 テージョ王立歌劇場柿落し

歌劇 『インドにおけるアレキサンドル大王』

上演リヴェット 表紙

〔上図〕 ペダガッシエ素描ルグラ版画『リス

ボン荒虚の偉観』(初版) 第四 歌劇場

## 第一節 絶対王政の栄華と王立新歌劇場の建設

大航海時代の先陣としてポルトガルは、十五世紀中葉以降アフリカ、アジア、南米の諸地域を植民地とし、戦国時代の日本へも渡来した。その後六十年に及ぶスペイン従属を打破し、ブラジルでの金鉱開発を財源に豪華なバロック文化を創出する。その事例にはマフラ宮殿やネセシダス宮殿の壮麗な建築が通常挙げられるが、リベイラ王宮北側への新たな歌劇場造営も注目すべきである。絶対王政の栄華を象徴する王立歌劇場、テージョ河畔歌劇場はリスボンへの遷都四百年を記念して企画され、王妃マリアナ・ヴィトリアの誕生日に柿こけらおと落しが行われた。新歌劇場の破壊と焼尽はリスボン大地震による名高い被災のひとつであり、その様相はペダギシエ素描『リスボン荒墟の偉観』の一幅をなし、ポルタル著『リスボン震災史譚』では詳しく語られる。

ポルトガル王権による音楽活動の重視と振興は、ジョアン五世の王妃マリ・アンネ・ド・オスレリアの識見にとりわけ啓発されたものである。神聖ローマ帝国皇帝レオポルド一世の皇女である彼女は、一七〇八年ブラガンサ王家へ輿入れした。国王は十九歳にして即位第二年にすぎず、花嫁は年長の二五歳である。彼女の意向に沿って、リスボンの宮廷にはウィーン風の儀式が浸透するのである。彼女が育ったオーストリア宮廷では、統治者の栄光を示すべく、音楽が公式行事の主要な要素であり、各種の典礼はカンタータ等の演奏が含まれていた。また、皇帝をはじめ皇族の誕生日や聖名日にはオペラが上演され、ときには新作も献呈された。① マヌエル・カルロス・ブリトの近著『ポルトガル十八世紀の歌劇』には、ジョアン五世結婚後の宮廷がつぎのように描かれる。

一七二六年に創刊された週刊誌『ガゼッタ・デ・リスボア』によれば、その前年より日曜日には王宮で音楽会が催され、国王と王妃が臨席するとともに、すべての貴族と貴婦人がこれを傾聴するようになった。国王や王妃や王族の誕生日と命名日、さらには姻戚である外国君主、すなわちオーステリア皇帝・皇妃やスペイン国王・王妃を慶賀してセレナーデ、すなわち器楽と声楽の合奏が催される。これらは宮廷の公式行事であって、ときには外国使節も招かれるが、国王やその親族を祝しては王妃大広間で、また王妃とその親族を祝しては国王大広間で行われる。〈中略〉宮廷でセレナーデを奏するのは、主として王宮礼拝堂に所属する楽士であり、ホルンやトランペットの要員はしばしば王国陸軍の音楽隊から充当された。たとえば一七二八年には歌手は四十名以上の歌手が起用され、その大半を占めたのはイタリア人である。

ブリト著『ポルトガル十八世紀の歌劇』(ケンブリッジ、二〇〇七年)②

やがて傑出した作曲家が輩出するウィーンでも、宮廷にはイタリア人音楽家が多く登用され、公式の行事に彼らの作曲と演奏が組み込まれた。ヨーロッパ各国を旅行し、みずからの見聞に基づいて記述された音楽史、比較文化の先駆とも評価できるチャールズ・ブルネイ著『総合音楽史』を参照する。

フェルディナンド二世からシャルル六世の御世まではイタリア語とイタリア音楽が、際立って重視された。十八世紀の初頭には、レオポルド一世とヨセフ一世は、イタリア人の作曲家であるツイアーニ、コンンティ、ボノンチ二兄弟を

① ジョージ・J・ビュロー著、関根敏子監訳『ドイツ音楽興隆』(『西洋の音楽と社会』5 後期バロック)、音楽の友社、一九九六年。一四五―一四八、一五四―一五五頁。

② Manuel Carlos de Brito, *Opera in Portugal in the Eighteenth Century*. Cambridge. 2007. pp. 7-8.

招請された。また、即位するや、シャルル六世はすぐさま叙情詩人パリアティおよびアポストロ・ゼノに月桂冠の榮譽を授けた。

一七二四年オーストリア皇女（マリア・アマリア）の誕生を祝してウイーンで催されたオペラ公演は、絢爛豪華を極めた。演技者はすべて高位高官であり、指揮者である皇帝ご自身がハープシコードの伴奏で朗詠された。演じられた作品は脚本アポストロ・ゼノ、演出カルダラによる『エウリュステウス』である。同年五月三十日の『日々新聞』に短評が掲載され、声楽および器楽の主要な演奏者名が付記された。悦楽のため企画した上演が、かくも盛大になされることにカルダラは恐縮したが、全編滞りなく遂行されるのを見て喜んだと言う。歌手は七名、奏者は二二名であつて、踊り手はすべて高位の家柄に属し、ふたりの皇女も含まれた。

皇帝もおおいに満悦され、三度目の上演が終わると、出演者に富籤を供された。一等二千フロリン、二等千フロリン、三等五百フロリンという賞金で、それらに相当する宝石や金時計を授与されたのである。（当時七歳の）マリア・テレザ皇女、すなわちのちの神聖ローマ帝国皇后・ハンガリー女王はこのオペラ公演で重要な一節を歌い、後年誇らしげにそれを語るのであつた。

ブルネイ著『総合音楽史』（ロンドン、一七八九年）①

音楽の政治的価値を認識したポルトガル宮廷は、一七一四年ローマ教皇庁に仕える歌手四名を招請し、やがてリスボンではこれらの歌手が国王大広間でセネナーデを歌つた。また、イタリア駐在ポルトガル大使フォンテス伯爵を紹介して、作曲家ドメニコ・スカルラッティに創作が依頼され、その成果『ポルトガル国王誕生日讃歌』が当地のポルトガル大使館で初演される。② ドメニコの実父アレッシサンドロ・スカルラッティは、六〇余のオペラと五〇〇余のコンサートタを作曲したバロック期イタリアの大家である。子息のドメニコも初期には主として教会音楽やオペラを作曲し、教皇庁にあつて音楽家最高の要職、サン・ピエトロ大聖堂ジュリア礼拝堂楽長の地位にあつた。榮譽ある地位を一七一九年彼は辞任し、リベイラ王宮の礼拝堂楽長として招請される。チェンバロ奏者および音楽学者として高名なラルフ・カークパトリックは、卓越した評伝『ドメニコ・スカルラッティ』のなかで、イタリア人招請の政治思惑とリスボンにおけるイタリア音楽への傾倒を描く。

一七二六年トルコ侵入を阻止する十字軍に多大の貢献を果たした報賞に、ジョアン五世はリスボン総大司教座への昇格をローマ教皇に裁可させた。そのため教会の聖威が絶大と成り、とりわけ音楽の機能が重視されるに至る。ポルトガル国王は、ヴェチカンで演奏される曲目の楽譜を高額な価格で入手し、聖歌隊養成の専門学校も設立した。教皇庁の礼拝堂におけると同様、教会用の作曲がここでも開発される。ヴェチカンの歌手が多数リスボンへ誘致され、なかでもサン・ピエトロ礼拝堂管長ドメニコ・スカルラッティの獲得を、ジョアン五世は列強への輝かしい勝利と自讃した。

スカルラッティは三十名から四十名の歌手とほぼ同数の器楽家を統率し、これら演奏者の大半は、イタリア人であつた。ローマでもリスボンでも教会における彼の役割は変わらず、無伴奏あるいはオルガン伴奏によつて独唱と合唱が交互に続き、ときには二組の聖歌隊に歌われる作品を擬似対位法によつて創り続けることであつた。そうした種類の曲目は父アレクサンドロ・スカルラッティもかつて大量に作曲したのである。ポルトガルに保存されるこの時期の作品は僅少であつて、大地震ののちリスボン総大司教区で復元された『神を讃える！』第八部と『神の栄光に！』第四部のほかは、地方都市の図書館に若干蔵されるのみである。

① Charles Burney, *A General History of Music from the earliest Ages to the Present Period*, London, 1789. Volume IV, p.578.

② Brito, *op.cit.*, pp.1, 7-8,

「一七二一年の大晦日にリスボンのサン・ロケ教会で、」と当時の『ガゼッタ・デ・リスボア』は報じる。「主上る神よりこの年ポルトガルの王国および国民が賜ったあらゆる恩恵に感謝する聖儀として、高名なるドメニコ・スカラッティの作曲による『神を称える!』が、多様な聖歌隊によって演奏された。」この聖儀は総大司教教会助祭長、ジョゼフ・ディオニシオ・カルネイロ・デ・ソーサ閣下が運営され、すべての廷臣と聖職者がそれを輔佐した。会堂全体は豪華な装飾と無数の照明が施され、聖歌隊には美事な紋標を描いた楔型の演壇が特別に設営された。聖儀の執行には理解深く積極的であられる総大司教祝下が、これらを統括し、費用をも調達され、以前から厳粛かつ慎重にすべて配慮されたのである。宮廷の貴族全員が列席し、民衆も多数これに参加した。

カークパトリック著『ドメニコ・スカラッティ』(一九五三年) ①

宮廷へのイタリア歌劇浸透は緩やかで、教会音楽のカンタータを模したセレナーデー、小規模な器楽と声楽の合奏がむしろ好まれた。オペラについては風紀上の理由によって、上演や観劇に厳しい制約が課せられた。この時期のいわば音楽社会史に関しては、一七一五年創刊の週刊誌『ガゼッタ・デ・リスボア』のほか、『エリセイラ伯爵日記』や『エヴォアラ日誌』に貴重な証言が含まれ、これらに依拠する前掲『ポルトガル十八世紀の歌劇』をさらに引用する。

『エヴォアラ日誌』によれば、イタリア歌劇『ドン・キホーテ』といくつかの笑劇が、一七三〇年三月二一日と一七三二年二月五日イタリア人歌手によってポルトガル宮廷で上演され、婦人にもその観劇が許された。また、『エリセイラ伯爵日記』一七三三年一月二十日の記述では、アレクサンドロ・グスマイオの脚本、フランシスコ・アントニオの作曲による歌劇を三度上演するため、王宮に広大な劇場を建築中との由。カーニヴァルと重なる当日そこに登場したのは、三人の名歌手、パガティ姉妹と推察される。なお、フランシスカ親王の誕生日に向けたリハーサルには多く貴婦人がこれを見詰め、数名は新調のドレスで正装した、と『エヴォアラ日誌』で語られる。に誌される。翼部を備えた劇場が完成した。王宮でリパーサルに接した貴婦人たちは、各自の豪邸でパガティ姉妹を聴く準備を始めた、『エリセイラ伯爵日記』一七三三年二月十日にしろされる。しかし、この姉妹が実際に王宮で歌ったか否か、国王がそれを視聴したか否かが定かでない。

同月十七日ジョアン五世は、とエリセイラ伯爵はさらに続ける。カーニヴァルを過すべくマフラへ行つた。国王の臨席を用意したのに、観劇しないのである。貴族の前で歌劇を演ずるつもりで、歌手たちは豪華な衣装で扮装した。観劇を希望する貴族は王妃の許可を得て、翼部から密かに舞台を見詰めた。公然と観劇できたのは、王妃の侍従だけである。護衛長のマヌエル・デ・ソーサは同席を許されず、隠れて見るのを嫌って外に出た。上演の最後は懺悔木曜日であり、国王は月曜日にマフラから帰つたものの、観劇はせず、弟君アントニオ親王も同様であった。

ブリト著、『ポルトガル十八世紀の歌劇』(二〇〇七年) ②

一七一〇年リスボンには五百人を収容する芝居小屋があり、複数のポルトガル劇団が主としてスペインの喜劇や伝統歌劇サルスエラを公演した。そこでは評判のスペイン人歌姫も登場し、やがて本場の一座も来演する。一七一三年ポルトガル宮廷ではジョアン五世の誕生日にサルスエラが供され、その演技に王女一名と官女七名が参加した。この企画を推奨した王妃マリアナ・ヴィトリアは、パプスブルク家統治下のスペイン芸術に理解深く、かつてウイーン宮廷でサウスエラを演じたと伝えられる。歴代のポルトガル駐在スペイン大使もサルスエラの隆盛に尽力し、そのひ

① Ralph Kirkpatrick, *Domenico Scarlatti*. 1953. pp.68-69.

② Brito, *op.cit.*, p.10.

とりロス・バルバセス男爵は専用の劇場を建設した。①

慈善協会の主催によつてロシオ広場の王立万聖病院でもスペイン歌劇団の興行がなされたが、作品の内容と女役者の素行を背徳的と非難するイエスズ会士の諫言もあつて、ジョアン五世は一七二七年一切の公演を禁止した。その二年後慈善協会のエリセイラ伯爵フランシスコ・ザヴィエル・デ・メンゼスは、万聖病院の経費を捻出すべく、神学者三十名の書名を添えて興行の再開を王権に請願した。この歌舞を愛好し、芸人を庇護したフランシスは、民族産業の自立を熱望し、壮途半ばに倒れた開明閣僚、第三代エリセイラ伯爵の子息である。

やがて一七三八年数名の事業家がエリセイラ伯爵の所有地を借り、新たな劇場、テアトロ・ルア・ドス・コンデス劇場を建設した。劇場の中庭は伯爵家の邸内に通じ、柿落しに『皇帝チトスの慈悲』の慈悲が上演された。名門貴族エリセイラ伯爵の豪邸はロシオ広場の北西二百メートルのアヌンシア小路に位置し、西端の劇場は広大な再独立広場に面する。二十世紀に至りこの街角に映画館が開設され、現在はハード・ロックの席亭として若者を呼び寄せている。

ボローニヤ出身の作曲家ガエターノ・マリア・シアッシーも、一七三四年からポルトガル宮廷へ招請され、リスボンでも『アルタセルス』など数々のオペラを作曲し、一七三七年にはアカデミア・ダ・トリンダデにおいて四つの作品が上演された。しかし、一七四二年ジョアン五世は重病に冒され、厳粛に国王の快癒を神に祈願すべく、ポルトガル全土における演劇、舞踊、演奏等の催しがすべて禁止された。その困惑をシアッシーはイタリアの知己に書簡で伝える。

国王の重病のため、最初の発作が生じた当日から、ポルトガルではすべての劇場公演と舞踏会が禁止され、国民が信仰に徹するよう命じられました。教会における祭事と聖歌は禁令から除外され、僅かながら私にも務めがあります。

シアッシー 一七四二年五月一日付マルチニ神父宛書簡 ②

## 第二節 新歌劇場の偉容と地震による壊滅

一七五〇年七月三十一日に専制君主ジョアン五世が逝去し、まもなく新たな国王ジョゼ一世はポルトガル歌劇の振興に着手した。外務担当の國務尚書セバスチアン・ジョゼ・カルヴァリオ・エ・メロ（のちのポンバル侯爵）に補佐されて、ローマ駐在ポルトガル大使を介して評判の歌手ジオアチーノ・コンティ招請の交渉に成功する。ジョアン五世の逝去以降一手に政務を統括するカルヴァリオであるが、ジョゼ一世の遊興や狩猟にカルヴァリオが加わることは稀であった。しかし、国王一家の音楽愛好には理解を示し、芸術家の招聘に尽力した。すなわち、マヌエル・デ・ブリトによるポルトガル歌劇史には、イタリアのカストラート歌手、ジツイエツロの招聘についてポルトガル宮廷の苦労が叙述される。

一七五〇年七月三十一日にジョアン五世が逝去し、早くも翌年の三月ジョゼ一世は招聘可能な最良のオペラ歌手と交渉を始めた。外務担当の國務尚書にして後年独裁的な宰相となるセバスチアン・ジョゼ・デ・カルヴァリオ・デ・メロ（ポンバル侯爵）が、ローマ駐在ポルトガル大使アントニオ・フレイレ・デ・アンドラデ・エンセラボデスと交した一連の書簡によれば、ジオアチーノ・コンティ（通称ジチエロ）との折衝を開始し、招聘に経費を惜しまぬ国王の意向を示した。遅々たる交渉が一七五二年三月まで一年間続き、種々の根回し、籠絡、密事を必要とした。（特殊のポル

① Brito, *op.cit.*, pp.2-4, 9.,

② Gaetano M. Schiassi, Letter to Padre Martini on 1 May 1747. in Brito, *op.cit.*, p.22.

トガル人周旋屋も雇い、賄賂を求める歌劇団経営者アバトにも応じた。最初の書簡で国務尚書は総大司教教会と王宮音楽堂での演奏を求めたが、のちにその契約は王宮音楽堂のみに変更された。

ジツイエツロ自身への契約も高額に過ぎることに、カルヴァリヨはある書簡でイタリア大使に共感しているが、寛仁大度な国王は意に介せず、そのように指令じた。住居費、飲食費、交通費のほか、契約終了後の手当もそこに含まれる。ミラノ歌劇場で演じたのち、ジチエロは謝肉祭のあと陸路の旅に就く。旅路の難を避けるため、カルヴァリヨが綿密な案内図を届けていた。自身の馬車で彼はローマへ寄り、以後旅の負担はすべてポルトガルに依存した。

ボローニア在住のテノール歌手アントン・ラーフなど、他の声楽家の招請についても書簡が保存される。彼には年俸三十万クルゼドが提供された。

ブリト著『ポルトガル十八世紀の歌劇』 ①

また、王宮の北西端に広大な歌劇場を新設すべく、高名な建築家フェルディナンド・ビビエナの子息ジョヴァンニ・カルロが一七五二年イタリアから到着した。画家ジアコモ・アゾニニや演出家ペトロニオ・マゾニなどもこれに同行した。彼らはリスボン近郊のサルヴァテラ劇場とアジュダ劇場をも設計する。一七五四年には旧来のリベイラ王宮フォルテ劇場でダヴィド・ペレズ作曲の『イペルメストラ』など歌劇ふたつが供されるとともに、謝肉祭にはサルヴァテラ劇場でピエトロ・メタステイーオの脚本、ペレズの作曲による『シリアにおけるハドリアヌス皇帝』が上演された。

② 一七五五年リスボンでは遷都五百年を祝賀して、海洋帝国の繁栄と豪華と歓楽が謳歌され、頂点とも言うべき王立テージョ新歌劇場の柿落しは、三月三十一日王妃マリアナ・ヴィトリアの誕生日に挙行された。ブルネイ著『総合音楽史』にはリスボンにおける新歌劇場除幕の様と当日上演された『デモフォアンテ』について興味深い証言が記録される。これなるオペラの作曲者ダヴィド・ペレズは、ナポリ在住スペイン人の息子として生まれ、同市の音楽学校でまずヴァイオリンを修業し、若くしてパレルモ大聖堂の礼拝堂楽長に選ばれる。一七四一年からはパレルモやナポリの劇場に依嘱で作曲を続け、なかでも『皇帝チトスの慈悲』が評価を高めた。やがてローマに招かれた彼は、『セミラミーデとファルナセ』などオペラ数曲を制作する。③

一七五二年ダヴィド・ペレズはポルトガルへ行き、ジョゼ一世の依頼を請け負った。リスボンで披露した最初のオペラ『デモフォアンテ』は、多大な称讃を博した。ジジエロは主役のソプラノを演じ、名歌手ラーフがテノールを務めた。加えて強力なオーケストラと絢爛たる舞台によって豪華な演出が実現したのである。しかし、一七五五年三月三十一日王妃誕生日に除幕した王立新歌劇場は豪壮な構築と華麗な装飾によって現存するいかなる劇場をも凌駕するものであった。ここではペレズがオペラ『インドにおけるアレキサンドロス大王』に新たな趣向を凝らし、マケドニア重装軍とともに一団の騎馬を登場させる。大王の軍馬には宮廷馬術師範のひとりが乗り、秀麗な騎馬の闊歩にふさわしく、馬場でペレズが作曲した旋律に合わせ行進した。こうした演出に彼は無限の力量を備え、マドリッドの大劇場におけるファリネリの試みを遙かに超えていた。絢爛豪華な舞台を用意するとともに、ポルトガル国王は可能なかぎり多数の歌手を徵募し、ペレズ作曲の歌劇をもっとも完璧かつ効果的に上演すべく、あらゆる便宜が供されたと言える。

ブルネイ著『総合音楽史』 ④

① Manuel Carlos de Brito, *Opera in Portugal in the Eighteenth Century*, Cambridge, 2007, pp.24-25.

② Brito, *op.cit.*, pp.24-25, 136.

③ Burney, *op.cit.*, p.570.

④ Burney, *op.cit.*, pp.570-571.

新歌劇場で配布された小冊子の表紙には歌劇の題目と王妃の御名が大書され、メタステイーオの脚本、ペレズの作曲と明記される。アレクサンドロスを演じるラーフをはじめ、著名な声楽家を連ねる配役が紹介されるとともに、カルロ・ビビエンナによる舞台装置がローマの画家ベラルディによって描かれる九点の版画も挿入された。①

ポルトガル、アルガレヴ、領有諸地域の敬虔なる王妃マリアナ・ヴィトリア陛下の輝かしき誕生日を祝賀し

聖徳深き国王陛下の命による

リスボン王宮大劇場新築柿落し<sup>しけり</sup>

## 歌劇 インドにおけるアレクサンドル大王

脚本：ローマの著名な詩人であるピエトロ・メタステイーオ

脚色：フィレンチェ人にしてウイーン宮廷およびペテルブルグ宮廷に招請され、

ポルトガル王室詩人であるジュゼツペ・ボネチイ

作曲：ナポリ人にしてポルトガル王女諸殿下の師傅<sup>しふ</sup>であるダヴィド・ペレズ

### 配 役

アレクサンドロス大王：アントニオ・ラーフ

インド大陸A国の王にして、クレオフィードの恋人ポーロ：シチリアの名歌手カファレリ

インド大陸B国の女王にして、ポーロの恋人なるクレオフィード：王宮礼拝堂専属歌手ドメニコ・ルシアーニ

ポーロの妹：ジゼツペ・ガリエニ

ポーロ国王軍の將軍ガンダルテ：王宮礼拝堂専属歌手シモーネ・シウツシ

アレクサンドロス大王の腹心にして密かな敵手ティマゲーネ：王宮礼拝堂専属歌手ジュゼツペ・モレリ

ラ・グロリア：王宮礼拝堂専属歌手カルロ・レイナ

(謹製 一七五五年シルビアーナ王立印刷所) ②

主役のアレクサンドロス大王に扮するラーフは、一七二四年ボン近郊で出生し、やがて十八世紀最高のテノール歌手と称讃されるに至る。二五歳にしてヴェネチアのグリマニ劇場における歌劇『ファルナス王』でデビューし、著名な詩人メタステイーオの脚本に最適の歌手と称讃された。その後イタリア各地で声望を高め、一七五二年からポルトガルに在留したのである。インドXXの国王ポーロを演じるカファレリは、南イタリアのバリ近郊で生まれ、一七〇年伝説の名歌手ファリネリの薫陶を受け、のちにはその好敵手に数えられる。二四歳のときナポリで注目されたこのカストラートは、一七五二年グルック作曲『皇帝ティトスの慈悲』で絶讃され、翌年ヴェルサイユへ招請された。ポーロの恋人、女王クレオフィードとして歌うルシアーニは、一七四七年ローマの舞台で称讃を博し、つとに一七五二年よりポルトガルに招請されていた。③

① Brio, *op.cit.*, pp.28-29.

② *Libretti Alessandro nell'Inde, dramma per musica*, Lisbon, 1755.

③ *Quell'usignolo, le site des premiers interpretes baroques et classique*, Raaff. Caffarelli, Luciani. on-line.

著書『ポルトガル十八世紀の歌劇』において音楽史家ブリトは、保存された史料に基づき王立歌劇場における観客の内訳を明示する。すなわち、一階一等席を占めるのは、のなかに王立劇場への入場を許可された観客一覧が見出される。すなわち、ポルトガルおよび外国の貴族、高位聖職者、高等裁判官、王国軍の将校と士官、民兵指揮官、国王ならびに王妃の侍従、政府省庁の長官、ポルトガルおよび外国の実業家などである。その後方第十一列に一等席から溢れた貴顕、第十二列には貴族の侍女、第二二列にガスパール神父や外科医ジョゼ・カルヴァリヨなど宮廷の要人が並ぶ。リスボン総大司教とパルハバ三親王には特別席が用意された。①また、二階席では高位の貴婦人や外国の大使等が観劇し、三階の玉座に国王一家が臨席した。

落成披露の『インドにおけるアレキサンドロス大王』に続いて新歌劇場では同年六月に『皇帝ティトスの慈悲』、初秋には『アンティゴノ』が上演された。六月に観劇したフランス海軍の将校シュヴァリエ・デ・クルティユは、劇場の規模と装備についてかなり詳細な証言を綴る。

ポルトガルの国王はイタリア歌劇の上演のため、毎年二百万クルザドも計上する。宮廷において毎週二度か三度供覧される舞台は、まことに壮大かつ豪華である。このたび国王は華麗で豪壮な歌劇場を造営された。場内は八角形をなし、四列のボックス席が配される。深奥を占める玉座は大理石の列柱で支えられ、金色の青銅で飾られる。舞台の両脇にボックス席が配列され、正面を占めるボックス席、すなわち一等席と四等席には金色の欄干が付く。両脇の二等席と三等席は前方が開け、金箔の飾りが照明を浴びてダイヤモンドのように輝く。これなる豪華、精妙、高雅は羨望のまтоである。歌劇場全体が豪壮であつて、奥行八十フィート、間口六十フィートに及ぶ。(中略)

リスボン滞在中にふたつの公演があつた。その都度我らは国王より招待を受けた。一等席を確保し、光栄にも観劇に招くよう、宮廷の要人に指示されたのである。生来ポルトガル人は温厚にして鄭重であるが、この接待は格別の優遇である。イタリアの劇場コルネイユ、著名な作曲家アスタシの『皇帝ティトスの慈悲』が上演された。舞台の景観と装飾は絶妙であつた。会場の広壮さと内装の華麗さが目を見張る。我らの多くはイタリア音楽に聴き惚れた。それが気に入らぬ人もあつた。カストラートが男女両役の歌唱と演技を担うからである。不慣れなフランス人はイタリア音楽の趣向を耳障りに感じる。②

新歌劇場落成の七カ月後、リスボンを襲つた巨大地震は、テージョ沿岸のリベイラ王宮一帯をとくに激しく揺るがせた。これによつて国王の間や謁見室を擁する王宮西側、税関所やインド商務館を含む王宮東側、さらには西北に隣接する総大司教教会と王立新歌劇場が破壊された。また、地震に誘発されたテージョの怒濤が沿岸部に数次氾濫する。さらに、万余の被災者が王宮広場に避難した翌朝、アルファマ丘陵から降下した火焰は、西側の税関所等を一気に併呑し、港湾に積まれた木材で一層火勢を強め、王宮西側、総大司教教会、国立新歌劇場をも完全に焼尽させた。マヌエル・ポルタルによる浩瀚な証言『リスボン震災史譚』は、王宮一帯の情況について火災による被害をとくに強調する。

王宮は地震によく耐えたが、火災のため壊滅した。猛火によつてインド商館の穹窿が崩れ落ち、そこに蔵される莫大なダイヤモンドと金銀一万一千件から一万二千件が灰燼に帰した同じく王宮のあらゆる画廊広間、居室、控室、官房が豪華な設備、金製銀製の食器、豪華で得難い宝玉、貴重な家具、さらには七万冊を所蔵し、ヨーロッパ随一と評される図書館とともに焼失した。こうした王宮内部の被害はその巨大さを測り知れない。

主要な省庁もすべて火災に襲われた。宮内府、財務省、軍事省、三身分協議会、インド商館、王立税関所、軍事

① Brito, *op.cit.*, p.28.

② Chevalier des Courtis, *Description de Lisbonne*. in Brito, *op.cit.*, pp.27.177.



財務局、その他多くの省庁が炎上したのである。これら壊滅した省庁における書類の焼失と公私にわたる損害も、いかに膨大であるかは測り知れない。

マヌエル・ポルタル著『リスボン震災史譚』 ①

ポルタルの震災記録において王宮一帯の状況は比較的簡略であるが、王立歌劇場に係っては際立って長文である。オペラをめぐる関心の深さを感じさせるが、説明の大半は焼尽した劇場の豪華な建築、周到な設備、高額な経費についてである。

王宮には歌劇場が隣接されていた。どれほど広い奥行か判らないが、横幅も同じく長大で、障壁もきわめて高く、大理石のバルコニーでは鉄製の欄干をつたって片側の空間から他方の空間まで移動できた。そこには水を満たした石造りの水槽が造られ、神からの劫罰に備えて消火栓も装置されていた。もともと奥には半円形の平土間があり、貴族、聖職者、行政官などの位階別座席が、舞台とほぼ同じ高さでに並んでいた。二階半円形の最前列には閣僚と国王ご一家の貴賓席が設けられ、三階の高みには各国大使の特別席も用意された。

この歌劇場がきわめて広壮であって、軍人は騎馬で乗り入れた。遠近法を駆使して歌劇に相応しい特色ある背景が舞台に組まれる。ここに招かれた多数のイタリア人音楽家は、ヨーロッパにおいてみな最良の部類に属した。エゲシエリひとりを招請するだけに、衣食住の経費のほか年俸三万五千クルザードを支給し、付き人への手当としても一万クルザードを与えたのである。

三つの巨大なシャンデリア、優美で精巧な水晶のシャンデリアが天井から吊され、開演の前は平土間も特別席も照らされている。ここでは消火装置が絨毯で隠され、燦然たる照明を楽屋裏に放ち、舞台が進行する。

歌劇場の公演、地上に降りた天国の観客について言えば、彼らに付きそう従者が多すぎる。ともあれこれこそヨーロッパにおける最高の歌劇場、ないしは最高の歌劇場のひとつである。

開演を待つ広間には到る所に水晶の鏡と美事な木彫りが配され、四隅には大理石の大きな胸像が置かれている。開幕まで国王陛下をお待たせするためか、広間がかくも豪華であるため、舞台の建造に劣らぬ出費であつらと評される。

かつまた、容姿や服飾を整える化粧室では、出演者の衣装を実際には高価でなくても、贅沢なものに装う必要があった。

以上私は被災の予備的な事実について書いた。ヨーロッパにおいてとくに著名な歌劇場、経費数百万クルザードと言われる歌劇場が、儂くも一気に壊滅した。まさしく火焰によってすべてが燃え尽き、灰塵に帰したのである。これについてはとくに信頼できる人物の証言を誌したい。歌劇場が燃え始めたとき、彼女は王宮に留っていた。激烈な火勢はあらゆる装置や油性の物体を焼き尽したと語る。また、こうした事態の確かな前触れと思われるが、すでに王宮では大砲の発射に似た轟音が聞えたと言う。地震では倒壊に到らなかつたが、火災によって歌劇場は焦げた石材の山となり、崩れた障壁の谷となった。

マヌエル・ポルタル著『リスボン震災史譚』 ②

新歌劇場等に出演するイタリア人も空前の災害に動転し、多くは国外へ逃れ、スペイン宮廷の庇護を願ってマドリッドを目指した。活躍したふたりの音楽家、ガダーニとジチエロをめぐって、ブルネイ著『総合音楽史』には、大地

① Manuel Portal, *Historia da ruina*, pp.53-58. in Francisco Luis Pereira de Sousa, *O Terremoto Do 1 de Novembre de 1755 em Portugal e um Estudo Demografico*, volume III, Lisboa, 1928, p.601.

② Manuel Portal, *Historia da ruina*, pp.53-58. in Pereira de Sousa, *op/cit.*, pp.602-603.

震による衝撃と以後の行路が記述される。

一七五四年にガダーニはリスボンに来て、ジチエロの助演を務め、一七五五年の大地震では辛じて難を免れた。他方ジチエロは凄惨な災害に戦慄し、信仰に没入して修道院へ隠遁し、余生をそこで過した。その歌唱と演技を高く評価して、若いガダーニを愛惜する彼は、修道院でしばらく居常を共にし、入念な指導を続けた。感銘深き高雅な歌手としてガダーニが名声を得る源はここに存する。早期にはガリックから演技を習得した彼は、イギリスで公演した歌劇『妖精たち』において演技の楽しさを知り、後年修道院でジチエロがその歌唱を錬磨したと言える。ポルトガルを離れたのち、イタリアのあらゆる大劇場で主役として名声を博し、ウイーンでも演技と着想を称讃された。イギリスでの再演は冬のシーズンであったが、早くからその前評判が絶大であった。

ブルネイ著『総合音楽史』 ①